

## 第 13 回国際中世哲学会 (SIEPM 2012 Freising)

山崎 裕子

2012 年 8 月 20 日から 25 日までの 6 日間、ドイツ・ミュンヘン近郊のフライジングにおいて、国際中世哲学会 (Société Internationale pour l'Étude de la Philosophie Médiévale) が開催された。今回のテーマは Pleasure of Knowledge で、5 つの主題 (ignorantia, desiderium, ordinatio, contemplatio, perfectio) で発表の募集がなされた。日本の国際中世哲学会正会員も増えてきたなか筆者に原稿依頼があったのは、5 年ごとに開催される国際大会に 6 回連続で参加していることによるのであろうと拝察し、25 年の経過に伴う最近の傾向にも目配りしながら、ご報告したい。

学会は、午前中に全体講演とコミッションの集会、午後にコミッションの集会ならびに個人発表とパネル発表、そして夜は、初日に学会元会長 David Luscombe 教授による基調講演 "Otto of Freising and historical knowledge" とフライジング市主催レセプション、火・木曜日にコンサート、木曜日に会員総会、金曜日にバンケットと盛りだくさんのスケジュールであった。さらに、水曜日午後には、希望者を対象に、3 つの目的地ごとのエクスカーションがあった。バンケットは、少し離れた所にあるヴァイエンシュテファン (Weihenstephan) で開催され、行きの移動の際にはバスの無料チケットが配布され、案内に立つ女子学生や実務担当責任者がバイエルン地方の民族衣装を着用して出迎えるという心配りも見られた。

会場は、カテドラルハウス、ギムナジウム、ヴァイエンシュテファン学術センターの 3 か所に分かれた。日本からの参加者は、八巻和彦、山本芳久、周藤多紀、中村秀樹、田内千里、筆者の 6 名で、山本、周藤、中村、筆者の 4 名が発表を行った。発表要旨提出の締め切りが学会の 1 年前の 2011 年 8 月末とこれまでに早くあったため、要旨提出が間に合わなかった方もおられたことと思われる。筆者は要旨提出後の内容に変更が生じ、25 年ぶりに発表はしたものの Proceedings 用の原稿を提出するには至らなかった。事務局からの連絡では、原稿提出について、自分たちで組んだパネル (special sessions) は過去の事例と照らし合わせて出版されない可

能性が高いので、別途出版するようにと促したり、原稿が今回のテーマや要請されている字数制限に合わない場合は、他の学術定期刊行物に提出するようにと、過度とも受け取れるほど、提出者数を減らしたい意向が前面に出ていた。今回の成果 (Proceedings) は、形而上学史の専門誌である *Quaestio* の特別号として出版されることになっている。

国際中世哲学会におけるこの 25 年間での大きな変化は、インターネットの発達・普及による伝達方法の改善、発表者数の増大、参加者出身地の拡大であろう。今回のプログラムは、1 回目の暫定プログラムが 2012 年 3 月 1 日付、2 回目プログラム (*versio paenultima*) が 7 月 5 日付、最終プログラム (*versio ultima*) が 8 月 12 日付で、3 回着信した。1987 年のフィンランド・ヘルシンキ大会で、8 月初旬になってもプログラム (当時はすべて郵便による) が到着せずに困惑したことを考えると、今昔の感に堪えない。連絡はつねに、SIEPM 2012 Freising の表記でなされ、第 13 回国際中世哲学会という表現には出会わなかった。この報告の表題に SIEPM 2012 Freising と書き添えたのは、そのためである。配信された 3 回のプログラムにはその都度、3 人一組での組み合わせにかなりの変化があり、担当事務局の尽力が窺われた。主題ごとに曜日が定められ、テーマに基づき自分たちで組んだパネルがその中に加わる形であった。カンタバリーのアンセルムスに関しては、筆者が働きかけて 2 つのパネルを組み、最終的には、個人で申し込んだアンセルムス関係の発表が事務局によってアンセルムスの第 3 のパネルとして組まれることとなった。

発表者が増えてきたことと並行して、1 週間に及ぶ会期中すべてに参加するのではなく、自身の発表を含めて 2 泊か 3 泊の参加というワンポイント参加者が増えているように思われた。たとえば、ホテルで 2 朝食を共にする機会のあったスイスからの参加者は、発表の前日にフライジングに来て翌日に発表、そして発表の次の日に帰路につくというスケジュールであった。発表証明書や参加証明書 (confirmation) が発行されるようになったのは、第 11 回のポルト (ポルトガル) 大会からである。今回の発表者数 (講演者を含む) は、最終プログラムによると 290 名弱であるが、国際学会の常として、日本では考えられないほど発表のキャンセルが多く、スケジュールも臨機応変であるので、実数はだいぶ異なると思われる。しかし、参加のみの方々も含めると、参加者数はかなりになるであろう。

日本の会員数増加には、2005 年に京都で開催された第 13 回国際コロキウムの貢献を忘れてはならないであろう。日本における中世哲学研究の状

況が認識され、西欧中世哲学の研究者が日本にいることを意外に思う発想は払拭されたのではないだろうか。

その翌週の 8 月 27 日から 30 日には、ポーランドのヴロツワフでシンポジウム“Cur Anselmus?”が開催され、筆者は提題する機会に恵まれた。ヴロツワフ（Wrocław, ドイツ語表記で Breslau）は、エディット・シュタインがヴロツワフ大学卒業まで住んでいた都市で、エディット・シュタイン協会によってその家が保存されている。シンポジウムは、アンセルムスの校訂版に多大な貢献をした F. S. シュミット神父の没後 40 周年を記念すると共にアンセルムス研究者の交流や国際会議開催に貢献してきたヘルムート・コーレンベルガー博士の古希を祝して、ルブリンにあるマリー・キュリー・スクロドフスカ大学の主催で開催されたものである。

シンポジウムが国際中世哲学会の翌週に開催されたこともあり、国際中世哲学会についての話題がいくつかあった。開催地がドイツであるにもかかわらずドイツ人の参加者数が多くなかったこと、使用言語により人の集まり具合がかなり異なったこと等である。アンセルムス関係のパネルのうち、パネル I は 3 人ともドイツ語での発表、パネル II は英語 2 人、ドイツ語 1 人であった。結果として、パネル I の人の集まりが芳しくなく、次回から英語で発表したいという希望者が出てきたほどである。他方、パネル II は、ロの字形の会場の一巡りでは座りきれず、少し遅れて入室した人は 2 巡目の列に着席することになった。事務局が組んだパネル III は、フランス語 1 人、英語 2 人で、これまでフランス語で発表してきたポルトガル人研究者が、今回初めて英語で発表していた。その理由を直接確認することはできなかったが、おそらく英語での発表の方がより多くの研究者に理解してもらえると判断したものと思われる。このパネル III の発表者は 3 人とも、母国語での発表ではない組み合わせであった。今後、自分たちでパネルを組む時には、発表内容の組み合わせだけでなく、使用言語の組み合わせにも、充分目配りすべきであるということで、意見が一致した。

次回の国際中世哲学会は、2017 年にブラジルのポルト・アレグレ（Porto Alegre）で開催予定で、1992 年のカナダのオタワ大会以来 25 年ぶりにヨーロッパを離れての開催となる。南アメリカでの開催は意外に思われるかもしれないが、2009 年 9 月に第 3 回国際中世哲学会議が、Anselm of Canterbury (1033-1109) — Philosophical Theology and

Ethics をテーマに、同地で開催された実績がある。ちなみに、これまでブラジルからの参加者は皆、筆者が認識している限り、国際中世哲学会においてフランス語で発表している。SIEPM 2012 Freising は、現存する世界最古（1040 年）の醸造所のあるヴァイエンシュテファンをバンケット会場として、ヴァイエンシュテファン（ビールの銘柄）を飲みつつ、幕を閉じた。南アメリカでの初の開催により、国際中世哲学会はこれから新たな方向へと展開していくことであろう。